

学習に特異的な困難を示す生徒に対する 認知特性に応じた指導法の検討

—英語学習に特異的な困難を持つ生徒への英単語指導法の検討—

○上岡清乃¹

北岡智子²

鈴木恵太³

(¹高知大学総合人間自然科学研究科)

(²TECHNO CRAFT KOCHI)

(³高知大学教育学部)

KEY WORDS : 認知特性 英語 指導

I. 問題と目的

本研究では、学習に特異的な困難のある生徒を対象とし、認知特性に応じた英単語指導法を実施し、その効果を検討することを目的とした。

II. 方法

1. 対象

対象は公立中学校通常学級に在籍する中学1年生の女子生徒で、学習の遅れを主訴とし、特に英語学習における困難さがあった。アセスメント時の生活年齢は12歳5ヵ月。WISC-IVやDN-CASなどの結果より、本児の学習上の困難さの認知的背景要因は主に、①視覚的短期記憶の操作、②概念形成とそれに基づく推理能力及び分類能力、③プランニング能力、④複数のモダリティの使用といった認知的短所に起因するものであると考えられた。一方、本児の認知的長所としては、①注意集中の持続、②ワーキングメモリー、③継次処理能力、④経験や知識に基づく視覚的長期記憶といった能力の強さが考えられた。

2. 指導方法

英単語指導では、英単語の読みと意味を習得することを目的とした。英単語の指導にあたり、継次処理能力を活用して、学習内容の定着を図るため、カタカナやイラストを用いる見本合わせ法を実施した。指導は、まずカタカナ(音)をイラスト(意味)に当てはめて学習し、次にカタカナ(音)とアルファベット(綴り)の対応関係を学習し、最後にアルファベット(綴り)とイラスト(意味)を一致させるという手順であった。カタカナ及びアルファベットで英単語を提示する際には、裏面に意味も記載したカード形式で提示し、表裏を交互に繰り返し読み上げるフラッシュカード法も実施した。見本合わせ法とフラッシュカード法を併用し、3セッションに分けて反復学習することにより、音・意味・綴りの関係を定着させ、英単語を習得することを目的とした。

3. 手続き

X年2月からX年5月の期間、週に1回の頻度で、1セッション30分程度として、全11セッション行った。

指導に先立ち、英単語の習得度を確認し、指導対象となる英単語を選定することを目的として、中学校英単語必修基本語より70語を抽出したプレテストを実施した。また、指導の効果を評価するため、指導終了後には定着を確認するため、プレテストと同様のポストテストを実施した。

Table1. エラーの分類および判断基準例

分類	例 (ocean)
正答	読みおよび意味ともに正答であったもの
意味誤り	読みは正しいが、「魚」などと意味を誤ったもの
読み誤り	意味は正しいが、「オセアン」などと読みを誤ったもの。
誤答	読みおよび意味ともに誤ったもの。

4. 分析

英単語の読みと意味についてエラーの分類および判断基準を作成した(Table1)。主な判断基準を4つに分類し、指導開始前のプレテストと指導終了後のポストテストについてエラーの質の推移を検討した。

5. 倫理的配慮

本研究は高知大学教育研究部人文社会科学系教育学部門研究倫理規則に基づいて行われた。研究に先立ち、本人および保護者に研究の内容を書面にて説明し同意を得た。

III. 結果

プレテストおよびポストテストの結果をFig.1に示す。プレテストでの成績は、正答が8%、意味誤りが6%、読み誤りが19%、誤答が67%であった。指導終了後のポストテストでの成績は、正答が97%、意味誤りが3%であり、読み誤りと誤答はみられなかった。

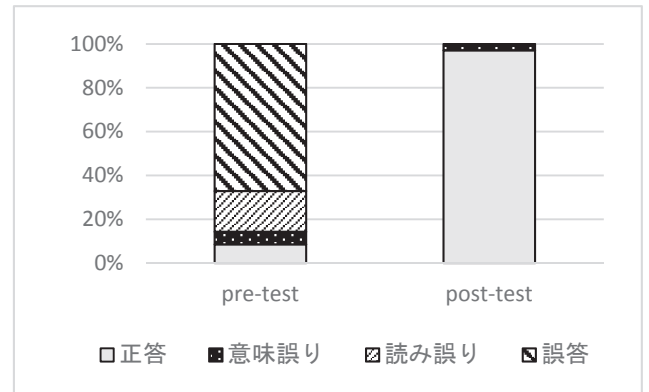


Fig.1. テスト成績の変化

IV. 考察

本児の認知的長所としては、ワーキングメモリーや継次処理能力、経験や知識に基づく視覚的長期記憶などが考えられたため、英単語指導においてはカタカナやイラストを用いた見本合わせ法及びフラッシュカード法を実施した。英単語指導終了後のポストテストの結果より、成績の向上がみられた。

本研究における指導法の特徴としては、見本合わせ法を実施し、まずはカタカナから音に慣れることによって、視覚的な負担が軽減され、意味と合わせてのインプットがなされやすくなったことが挙げられる。また、音・意味・綴りを3セッションに分けて学習したことにより、一度の情報量が少なく、かつ学習内容が反復されたことも成績に影響したと考えられる。さらに、ポストテストのエラー分析結果から、フラッシュカード法を併用したことによって、視覚刺激(綴り)に対応した聴覚刺激(音)のフィードバックが反復してなされたことが、英単語の綴りと読みの対応関係を確実にしたと考えられる。

よって、本指導法は英単語学習において、定着を図るうえで一定の効果があったと考えられる。

(KAMIOKA Sayano, KITAOKA Tomoko, SUZUKI Keita)